

日照不足と低温に対する農作物の技術対策について

令和元年7月10日

農林水産部担い手支援課

銚子地方气象台によると、千葉県では、6月28日頃から、日照時間が少ない状態が続いており、この状態は、今後2週間程度は続く見込みです。また、今後2週間程度は平年に比べ気温の低い状態が続く見込みです。

については、次の事項を参考に、的確な技術指導に努めてください。

1 全般

病害の発生が心配されることから、雨の合間を縫って、その日のうちに乾くように殺菌剤を散布するなど、適切な防除に努める。

施設園芸では、被覆資材をきれいし、遮光の開け閉めをまめに行って、日照量を確保する。

2 水稻

5月上中旬以降に移植した晩生品種は幼穂形成期～出穂期となり冷温障害を受けやすい時期となっている。この時期に平均気温20℃以下（最低気温17℃以下）が数日続くと冷温障害が発生しやすく、特に出穂前15～10日の穂ばらみ期は「障害型冷害」による不稔粒の発生で収量が低下する。また、飼料用米の「アキヒカリ」や「夢あおば」は耐冷性が弱いいため注意が必要である。しばらく低温が続くことが予想されるため、対策として深水管理により株元の保温に努める。

また、「いもち病」の感染しやすい条件となっているため、ほ場をよく観察し、発病を確認した場合は速やかに治療効果のある薬剤防除を実施する。また、出穂期は穂に感染すると「穂いもち病」に移行し被害が大きくなるため、止葉の治療を目的とした防除を徹底する。

3 野菜

(1) 野菜全般

日照不足による生育の遅れや茎葉の軟弱徒長に対しては、葉面散布を行う。また、病害虫の発生が多くなることが予想されるので、り病葉、り病株を早期に除去し、発生初期か

らの防除を徹底する。

育苗中のものは、苗鉢等の間隔を十分にとり通気性を確保する。セル育苗ではかん水や追肥を控えめにすることにより、徒長防止につとめる。

着果している野菜は、草勢を維持するために不良果の摘果を行い株の着果負担を軽くする。

(2) 施設野菜

施設内の湿度の高い空気が滞留しないよう換気し、可能な場合は循環扇を利用する。軟弱な生育をしている場合、曇雨天後の強光による葉や果実の焼けを防止するため、遮光資材を準備し、きめ細かな遮光に努める。

4 ナシ

黒星病については、果実への感染期となっているので、防除を徹底する。薬剤の散布については、ムラのないように丁寧に散布する。なお、薬剤については収穫前使用日数、総使用回数を確認して使用する。

豊水は満開後91～100日の最高気温が低いとみつ症の発生が多くなる傾向があるため、収穫の際はよく確認する。また、収穫が遅れるとみつ症重症果の割合が増えるため、やや早めの収穫を心がける。